

■ 第6回 平成25年度「近畿知財塾（4期）」

開催日：平成26年2月18日（火） 14時～17時

場所：常翔学園大阪センター 301号室

次第

1. コーディネータ（平松先生、才川先生）による開会あいさつ
2. 塾生による卒塾レポートの発表、採点
- 休憩（5分） —
3. 卒塾式
4. 卒塾レポートの表彰、コーディネータによる総評
5. その他連絡事項など

塾生による卒塾レポートの発表、採点

○ 各塾生が、レポート提出時に申告した発表時間を基準としてレポートを発表。（計19名）

発表者	発表テーマ
発表者1	知財推進体制の基礎構築
発表者2	3年後のA社、3つの姿
発表者3	なぜ、音声・色彩商標の取得を考えるのか？
発表者4	“緊急ではないが重要な”知財戦略
発表者5	知的財産活動による研究開発支援と会社の活性化
発表者6	数年後の知財戦略、体制、取組み
発表者7	特徴作りと知財
発表者8	電気エネルギーを駆動力とした各種機械の開発
発表者9	将来を見据えた出願に向けての取組み
発表者10	知財意識向上に向けた教育カリキュラムの策定
発表者11	社内部署を横断した知財管理体制の構築
発表者12	—知的財産活動に取り組むためには—
発表者13	知財マネジメント体制の検証と今後の課題について
発表者14	全部署の知財力UPを目指す
発表者15	知財塾で学んだこと、やりたいこと
発表者16	知的財産に対する社員の関心
発表者17	知的財産活動 最初の一步
発表者18	会社全体として、即ちビジネスに役立つ知財創出を！
発表者19	新製品開発担当としての知財
欠席者1	ヒット商品の開発と連動した知的財産活動の施策
欠席者2	知財（主に特許）を上手に活用する仕組みの構築
欠席者3	知財の取組み強化
欠席者4	当社の事業に即した知財活動の継承

- 出席した塾生、コーディネータが上位3位までを決定。(3位に限り3名まで。また、コーディネータに限り、欠席者も採点対象とした)
- 第1位：20点／第2位：10点／第3位：5点で点数付けし、コーディネータは3倍で計算して、参加者の合算で採点。
- 採点基準は、①レポート全体が各回の塾の内容に沿った内容になっているか、②塾で学んだ内容が、日々の知財活動に活かされているか、③数年後に想定する知財戦略、体制、取組みに具体性があり、なおかつ実現により企業活動の活発化が期待できる内容であるか、④①から③の記述内容が連動しているかの4点。

卒塾レポートに対するコーディネータの総評

<平松先生>

採点の考え方について

- 私は、①から③の評価指標ごとに10点満点で点数をつけて、また、各回の知財塾のテーマに沿った内容で整理されている人や、すでに実行に移したり、その実行を見直ししたりしている人に対し、点数を高くつけた。

今後の企業活動において重要なこと

- 今日の発表の中では、企業内の情報管理が多かったように思う。以前、アメリカの未来学者として有名なアルビン・トフラーが、「20世紀の経済は石油が動かしていたが、21世紀は情報が経済を動かしている」と発言していた。日本企業についても、今後、うまく事業活動を進めていく上では、どれだけ早くかつ有効な情報を入手し、実行・活用できるかが鍵になってくると私は考える。
- また、今後は企業が海外から人材を確保するなどして、日本語以外を公用語としてコミュニケーションする場が増えるようになり、日本にいながらにしてグローバル化の波に乗らざるを得ない時代がやってくる可能性は高いと私は思っている。
- 発表者が所属する企業の中には、創業してから100年を超えるところもいくつかみられた。それらの会社は、自社の強みを発揮し、長年、事業活動を続けてきたものと思われる。しかし、今後は、今までとは異なる強みを作り出して、新たな時代を切り開いていかなければならなくなるのではないかと強く感じた。

社会人になっても、勉強や人との交流を実践するべき

- 2年間、月に1回の塾生間の議論を中心に知的財産について勉強されてきて、皆さんの知的財産に対する知識や理解度は深まったものと思われる。この経験を、今後の知的財産の創出・活用をはじめとする企業活動に反映してほしい。
- 社会人になっても勉強してほしい。会社の中での勉強だけでは視野が広がらない。こういった場で自由に発言し、勉強する機会は貴重である。また、企業活動の活性化には、いろいろな人とのコラボレーションが重要なので、ぜひそのような機会をつくりだすようにしてほしい。

<才川先生>

企業の規模や業種に関係なく、知財活動は重要

- 皆さんお疲れ様でした。皆さんの発表を興味深くお聞きしました。
- 土生先生のお話の印象が強かったようだ。中小企業における知財の役割は、企業規模に比例して小さいという訳では決していない。今後どうするか、今の財産は何か、他社はどうなのか、今の自分たちの状況をどうやってトップに伝えるかは、土生先生の講義でもあったように、企業の規模は全く関係ないのだということを、今日の発表で改めて感じた。

- 企業の人が社長にお伺いを立てる際には、ネタを作らないと話を聞いてくれない。でも、皆さんの持っている情報は客観性がある。客観的な情報は、社長をはじめ誰も否定できない。これを生かすも殺すも、皆さんがどれだけアピールできるかによって変わってくる。

中小企業が元気かつ独自に事業展開するための工夫例

- 「大きくななくても良い」という発表があった。これも企業戦略の1つである。しかし、それを続けるには知財で守らなければあつという間にも買収される。
- 本日の発表の中で、B to Bの会社であるが、製造している油脂にネーミングしていこうという発表があった。これは大変良いと思う。例えば、「インテル・インサイド」というキャッチフレーズは、多くのパソコンの中に部品が入っていることを示している。また、多くの市販食品に含まれる人工甘味料「トレハロース」は、ブランド化されることで品質の高さや安全性などをアピールしている。
- B to Bであっても、自分たちの製品に名前をつけること、そして「入っている」と広く消費者にアピールしていくことで、利用する会社から信頼を獲得できれば、自社の価値をあげることになる。
- そうなれば、企業を買収される可能性も低くなるだろう。しかし、そのためには、きっちりと商標をとらなければならないし、そのための侵害調査も必要である。

情報管理の注意点

- プレゼン資料の下に、「〇〇 confidential」と記載しているものがあつた。これは大変危険である。
- 例えば、皆さんが、オープンな場で発表するときや、販売先へ売り込む際に、NDA契約を結んでいない段階で、資料に「〇〇 confidential」と記載することは、会社にとって「秘密」である情報を、まだ十分な関係性が保たれていない相手に対して開示しているということになる。すなわち、会社にとって、秘密情報の管理が不十分であることを示すことになる。
- また、秘密情報を受け取つた企業も、不正競争防止法では違反になる。そのため、そのような資料を持っていった際には、販売先の企業からは「その情報は受け取ることができない」と門前払いを食らう可能性もあるだろう。
- 企業にとって情報管理は大変重要なことである。その点はよく理解していただきたい。

【近畿経済産業局・コメント】

- 今日は卒塾おめでとうございます。塾生の皆さんには、2年間ご出席いただき、また、卒塾レポートを作成いただき、有難うございました。一部の方には、企業訪問や塾生発表等にご協力いただきました。本当に有難うございました。
- 今日の卒塾レポートをお聞きして、様々な業種の様々な立場の人が、自社の今後の業務のために活かそうという思いの下、参加し、卒塾レポートを作成いただいたことがよく分かつた。
- 「近畿知財塾」は、参加した皆さんの企業における知的財産の創出・活用に向けて、交流の輪を広げていくことにも意味があると考えているので、今後もこの関係性を継続していただきたい。こちらで協力できることがあれば、ぜひ協力していきたい。
- 2年の塾の運営に携わっていただいた、平松先生、才川先生、箱田先生に有難うございました。お礼を申し上げたい。事務局もご協力いただき、有難うございました。
- 皆さんも、これからも企業における知的財産の創出・活用に励んでいただければ幸いです。本日はどうも有難うございました。

以上